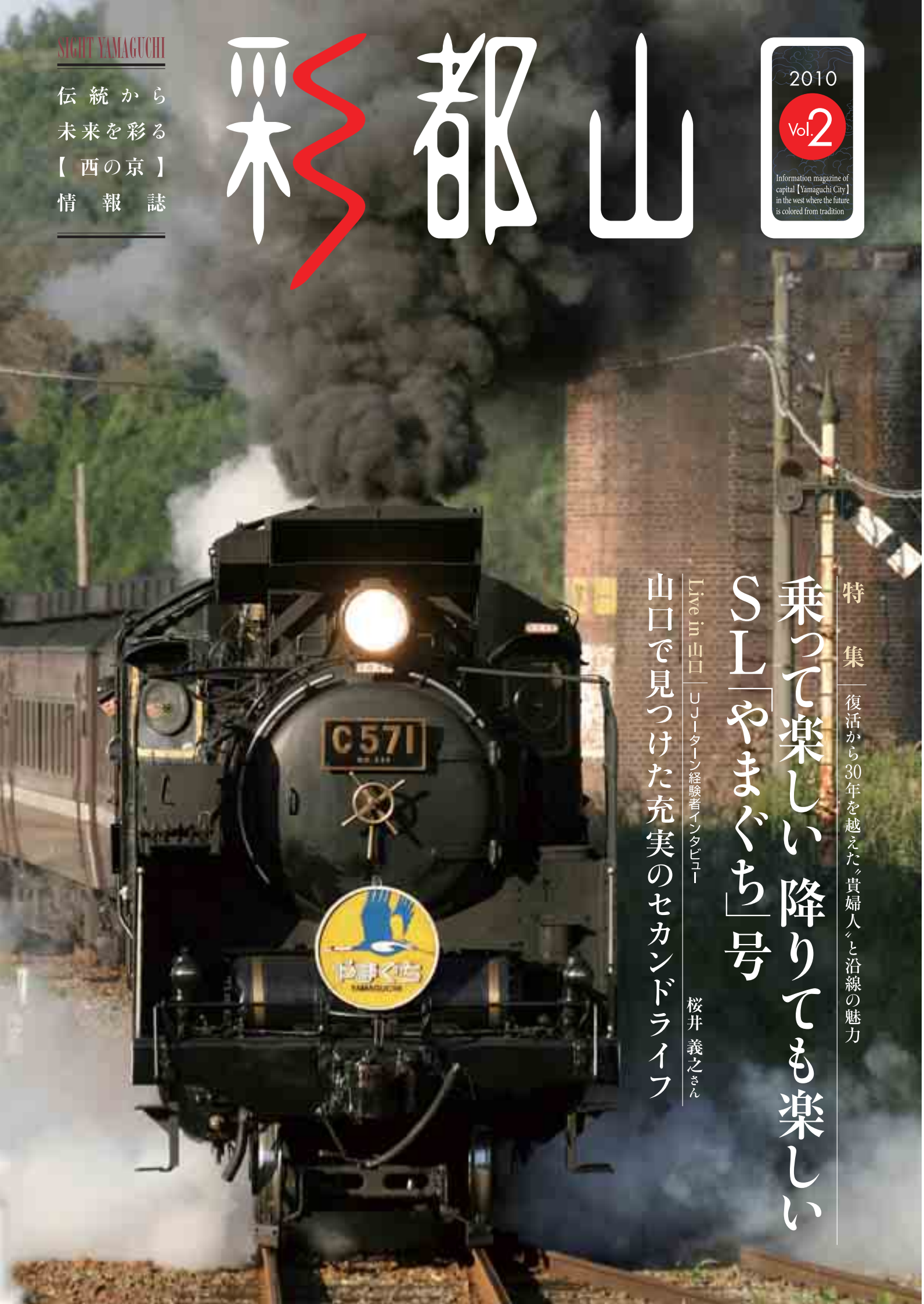
SIGHT YAMAGUCHI

伝統から
未来を彩る
【西の京】
情報誌

# 彩都山

2010
Vol.2

Information magazine of capital【Yamaguchi City】in the west where the future is colored from tradition




特集

## 乗って楽しい 降りても楽しい SL「やまぐち」号

復活から30年を越えた〝貴婦人〟と沿線の魅力

Live in 山口

## 山口で見つけた充実のセカンドライフ

UJIターン経験者インタビュー

桜井 義之さん

# 乗って楽しい
# 降りても楽しい
# SL「やまぐち」号。

SIGHT YAMAGUCHI 特集　復活から30年を越えた〝貴婦人〟と沿線の魅力

全国で初めてSL「やまぐち」号が山口線に復活してはや31年。その人気は全国各地、幅広い年代層に及んでいます。新幹線駅の新山口から、湯田温泉、県都・山口、新たに市に加わった阿東（あとう）地域を経て、お隣の津和野町までを結ぶ山口線は、山口市の大動脈。汽笛を鳴らし、白煙をあげながら走るSL「やまぐち」号の魅力を、バラエティに富んだ沿線と合わせて探ってみました。

2007年7月、阿東町地福（現・山口市阿東地福）にて。
津和野方面に向かうSL「やまぐち」号（C571）。

## 「石炭をば 早や積み果てつ」

（森鷗外著『舞姫』より）。

SL「やまぐち」号が出発を待つ新山口駅一番ホームに立つと、明治の文豪がその処女作の冒頭に記した一文が思い起こされる。現代にあっては忘れられがちな「石炭」というエネルギー源が、ここでは鷗外の時代と同様の大きな責任と期待を担っているからだ。

国鉄（当時）の近代化・合理化に伴って昭和四十年代に全国的に廃止された蒸気機関車（SL）は、ファンや地元からの熱い声に応え、一九七九（昭和五十四）年八月一日、山口線に復活した。

それから早や三十一年。優美なイメージから「貴婦人」とも呼ばれるC571・SL「やまぐち」号は、この間、変わらぬ人気を誇ってきた。運行日には全国から乗客が集まり、沿線にはカメラを構えたファンたちの姿が絶えない。

ポッポー。汽笛と共に新山口を発車した「やまぐち」号は、椹野川沿いや住宅街を走り抜け、名湯・湯田温泉、史跡が点在する山口などを経て、ぐんぐん山道に入る。

仁保からは木々に手が届きそうな中、上り坂での踏ん張りを感じさせながら田代トンネルを抜け、給水塔の残る篠目へ。続いて名勝・長門峡を過ぎ、りんご園や米どころ・阿東の平野の中を突き進み、終点は、小京都にして鷗外の故郷・津和野だ。

運行中、窓の外の風景は紙芝居のごとく一転二転し、さまざまな表情を併せ持った山口市の広さ、深さも感じられて、見飽きない。

そして、それぞれ趣の異なるどの客車に座っていても、シュッシュッ、ポッポッというSLならではのリズミカルな音と心地よい揺れに包まれ、ここだけが異空間、あたかもタイムスリップしたかのような感覚にとらわれる。

煤煙の匂いにも郷愁をそそられ、非日常感が味わえる六十二・九㎞、約二時間の旅。季節の色に染まった車窓からの風景と共に、心ゆくまで楽しみたい。

特別寄稿

# SL「やまぐち」号の思い出

写真●文／矢野 直美［フォトライター］
Photographs & Text Naomi Yano［Photo writer］

SL「やまぐち」号の旅は、心に残っていることがたくさんあります。

「貴婦人」の名で呼ばれる、C57機関車ならではの美しいフォルム。牽引する客車も、ステンドグラスが配置された優美なムードの「欧風客車」、旧型の電球が板張りの床をノスタルジックに照らす「昭和風客車」など、全て違うデザインになっています。車窓に広がる田園や森、見渡す限りの緑の世界も旅情を誘います。

SL「やまぐち」号は昨年、2009年に復活30周年を迎えました。その記念番組が地元のテレビ局で制作放映されることになり、私もゲストに呼んでいただきました。

番組には、SL「やまぐち」号を愛するさまざまな方たちが登場しました。その走る姿を現役時代も復活してからもずっと撮り続けている地元のファン。SLを見に行くのを楽しみにしている沿線のご家族。

そして運転や整備に関わる鉄道員の方々。「妻よりSLが好きなのかもしれんな」と照れながら話してくれた機関士さんの優しい笑顔。後輩に伝えていきたい思いは「SLに対する愛です」と仰った、整備士さんのまっすぐな眼差し……。

国鉄時代に復活し、30年間走り続けたSLやまぐち号は、本当にたくさんの人に愛され、たくさんの人の思いを乗せて走ってきたんだということを実感。思わず私は、ピカピカに整備されたSLやまぐち号を前に、「良かったね、また走れるようになって。こんなにたくさんの人に愛されて、本当に良かったね」と語りかけていました。

PROFILE プロフィール

やの なおみ。北海道札幌市在住。旅をしながら"撮って書く"フォトライター。また、女性の鉄道好きを表す「鉄子（てつこ）」の愛称でも呼ばれる。「ゆれて ながれて であう 幸せな瞬間」がテーマ。
主な著書に、『おんなひとりの鉄道旅』 東日本編・西日本編（ともに小学館文庫）、『北海道のんびり鉄道旅』（北海道新聞社）、共著『ローカル線をゆく』（阪急コミュニケーションズ）など。
http://www.yanonaomi.net/

# 沿線の必見やまぐち魅力スポット

新山口 湯田温泉 山口 仁保 篠目 長門峡 地福 鍋倉 徳佐 津和野

## 始発 新山口駅

**JR山口線、新山口～津和野間六十二・九kmを走るSL「やまぐち」号の沿線には、市街地、温泉、森林りんご園、田園地帯など様々な表情がそろっています。バラエティ豊かな各スポットを紹介しましょう。まずは、始発駅の新山口駅から。**

### 陰陽連絡線を支える拠点駅の底力

新山口駅は、二〇〇三（平成十五）年までは「小郡（おごおり）駅」と呼ばれていた。

小郡から島根県・益田までを結ぶ「山口線」は、もともと山陰線の一部として計画されたが、一九一三（大正二）年にまず小郡（現・新山口）～山口間が、一九二二（大正十一）年には津和野までが結ばれ、益田までの全線が開通したのは一九二三（大正十二）年だった。以後、山口線は「陰陽連絡線」として活躍し、小郡（新山口）駅は、山陽本線、さらに山陽新幹線と山口線を結ぶ拠点駅として大きな役割を果たしてきた。

一九七九（昭和五十四）年に全国に先駆けて山口線へのSL復活が実現したのは、沿線の魅力や小郡までの新幹線利用客への期待に加え、小郡駅と津和野駅の機関庫に転車台が残っていたことも大きな理由になったからだという。

新山口駅の北東側構内にあるJR西日本下関総合車両所新山口支所には、現在もその転車台や車両検査庫、石炭投入訓練室などを完備し、SL「やまぐち」号の安全運行を力強くバックアップしている。

23線を収容する往時の扇形庫
写真提供／山口市小郡文化資料館

### 新山口駅 一番ホームの熱気

SL「やまぐち」号が発着する新山口駅一番ホームは、三月～十一月のSL運行日、独特の熱気に包まれる。全国から乗車や撮影に訪れたファンたちは、発車時間のはるか前から高揚した面持ちで列車の入線を待ち構えている。

レンガやアーチをデザインしたホームは、縦書きの時刻表や柱時計、腕木式信号機、旧小郡駅名標などがレトロな雰囲気をかもし出している。川魚やユズ味噌、りんご等沿線の味覚を詰めたSL弁当やSLグッズも販売されており、旅情を高めてくれる。

やがてSL「やまぐち」号がバック運転で入線して来ると、ホームの華やぎはピークに達する。誰もが先頭の機関車に駆けより、あちこちでフラッシュが光って、発車までの約三十分間は、記念スナップ、セミプロ、プロ…と各カメラマン入り乱れての大撮影大会となる。

もちろん、熱気に覆われるのはホームばかりではない。主役のSL「やまぐち」号の運転室では、出発一時間前から機関士が加減弁を調整したり、機関助士が火室に石炭をくべたり…とウォーミングアップが行われている。室温が次第に上がっていく中、乗務員の動きはてきぱきと冷静だが、その表情からは、安全運行への熱い思いが伝わってくる。

# 湯田温泉駅 山口駅

新山口駅を出発したSL「やまぐち」号は約十五分後に湯田温泉駅、さらに五分後には山口駅に到着。二つの駅は、古くからの名湯、そして県都・山口の玄関口です。山口県随一の温泉宿泊基地と、文化施設の点在する山口駅周辺をゆっくり歩いてみませんか？

## 湯田温泉でほっこり

**湯**田温泉は、山陽路随一の名湯。無色透明の湯は、古都・山口のイメージにも重なるまろやかな肌ざわりだ。

駅の前では白狐「ゆう太くん」のモニュメントがお出迎え。その昔、傷ついた白いキツネがこの地にわき出る湯に浸して傷を癒したという伝説にちなんだ湯田温泉のシンボルだ。

駅から続く温泉街には、ホテルや旅館が立ち並び、日帰り入浴のできる宿や施設、さらには気軽にリフレッシュできる足湯も点在している。

**漂**泊の自由律俳人・種田山頭火（一八八二～一九四〇）の句碑を訪ね歩くのもいい。山頭火は、一九三八（昭和十三）年にこの地に一部屋を借りて〝風来居〟と名づけ、半年余り暮らした。温泉街のざわめきの中でその句碑と向き合えば、小郡・其中庵周辺の句碑からとはまた違った、のどかでユーモラスな印象が得られるだろう。

## 中原中也記念館

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
（「帰郷」／『山羊の歌』）

**そ**して、忘れてはならないのが、湯田温泉出身の近代叙情詩人・中原中也（一九〇七～一九三七）。

湯田温泉駅から徒歩十分の地には、中也の生家跡に建てられた中原中也記念館がある。

中也のシンボル・帽子を連想させる筒型の建物のまわりには、中也生誕の碑、彼の幼少期からあったカイヅカイブキの木、そして、中也ゆかりの山口線の枕木を敷き詰めた中庭などがあり、館内に近づくにつれ中也の世界に引き込まれていく造り。

館内には、遺稿や日記、書簡、詩集『山羊の歌』の初版本、コートなどの遺品が展示されている。

一階の常設テーマ展示は毎年一回、二階の企画展示は年に数回展示替えされる。中也記念室には中也に関する書籍が並び、情報コーナーでは直筆原稿、日記、写真などがパソコンで検索できる。

吹き抜けから差し込む柔らかな光りに包まれて、中也を育んだ山口の空気を感じつつその心や作品世界に浸ることのできる文学館だ。

見学の後には、詩碑のある高田公園や錦川通りのそぞろ歩きもお薦め。

**［中原中也記念館］**
山口市湯田温泉1丁目11-21　TEL083-932-6430
●開館時間／11月～4月は9:00～17:00、5月～10月は18:00まで
（いずれも入館は閉館の30分前まで）
●休　館　日／月曜日（祝祭日の場合はその翌日）、毎月最終火曜日
●ホームページ／http://www.chuyakan.jp/

**【中原中也】**
1907（明治40）年山口市湯田温泉生まれ。1934（昭和9）年に第一詩集『山羊の歌』を出版。1937（昭和12）年、鎌倉にて病死。著書は他にフランス訳詩集『ランボオ詩集』、第二詩集『存りし日の歌』。

## 山口駅周辺

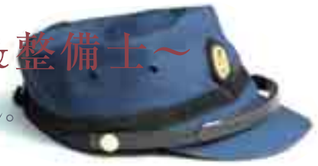
**山**口駅前には県内きっての商店街があり、駅から伸びるスカイロードの先には「日本の道百選」にも選ばれた美しい道「パークロード」が県庁まで続く。周辺には山口県立美術館、山口県立山口博物館、山口サビエル記念聖堂などが点在し、季節の色に染まった通りを散策すれば、心癒される。

**山**口駅が現在の駅舎に生まれ変わったのは、SL「やまぐち」号の復活前年の一九七八（昭和五十三）年。それ以前の木造の駅舎の様子は、市内在住の徳見七郎氏による彩色スケッチに明らかだ。氏の膨大な作品群の中には、当時の駅前風景や市内の踏切、市役所、一九九一（平成三）年に焼失した旧サビエル記念聖堂、さらには国鉄職員の制服や廃車で遊ぶ子どもたちの姿を描いたものもあり、現在の街の様子と見比べてみるのも楽しい。

**［山口市歴史民俗資料館］**
山口市春日町5-1 TEL・FAX 083-924-7001
●開館時間／9:00～17:00（入館は16:30まで）
●休　館　日／月曜日（祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日、年末年始
●ホームページ／http://www.city.yamaguchi.lg.jp/dannai/soshiki/kyouiku/bunkazai/rekimin.html

**【徳見七郎】**
1913（大正2）年、山口市生まれ。子どもの頃から山口市の風景や人々の暮らしの絵を描き続け、昭和初期からの山口の移り変わりを描いた1000点を越える作品は民俗学的にも貴重な資料とされ、山口市歴史民俗資料館に所蔵されている。

# SL運行の両輪～機関士&整備士～



安全に、快適にSLが運行していくための立役者が機関士さんと整備士さん。
どんな気持ちで日々の業務に取り組んでいるのか、聞いてみました。

## 情熱とチームワークが技を支える。

機関士（山口地域鉄道部）／**金重 洋二**さん

機関士・金重洋二さんは、小郡育ち。少年時代の記憶の中には、SLの姿や音があるという。「SLは身近な存在でしたが、JRに入社して初めて、実は全国十ヵ所でしか走っていない貴重な列車、と気づきました」。

平成十五年十月から機関助士としてSL「やまぐち」号に乗るようになった。蒸気を起こす石炭を炉に投入するのが仕事。往復で約二トンの石炭を手作業で入れていく。機関室の室温は夏場は六十度に達し、一日で体重が三kg落ちるほどの重労働だ。

翌年には免許を取得して機関士になった。いよいよ責任重大。「SLの運転は数値やマニュアルに従うのではなく、経験が頼り。線路の勾配やカーブなどの地形はもちろん、旅客の重さ、気温や湿度など毎回変わる条件に合わせた対応が求められます。基準になるのは音と煙。ポッポッという音で調子を判断し、ギアを入れます。何より、指示を出す機関士と石炭をくべる機関助士のチームワークが重要です」

判断の支えになっているのが、長年書き続けているSL日記だ。「日々の運転法や対処法などを書きとめておき、読み直しては参考にしています」

たとえば秋、朝露に濡れた落ち葉が線路を覆うと滑りやすいので、砂を撒いて摩擦抵抗を上げる…など、運転上の技や知恵が赤字や図解をまじえて記されている。このノートに影響されてか、今では機関士全員が記す乗務日誌も作られている。

「記録を通して後輩たちに運転技術を伝えていきたい…という気持ちを皆が持っていますから」

そんな金重さんが全国に誇りたいSL「やまぐち」号の魅力は、「まずバランスのとれたスタイルが圧倒的に美しい。沿線風景は山や平野、りんご園など変化があって飽きないし、SLの走る姿とマッチしています」

一番うれしいのは、お客様との交流。津和野では折り返し運転までの時間に、言葉を交わしたり、写真に一緒に写ったり…ファンレターが届くこともある。「お客様に喜んでもらえるよう、機関助士、整備士と力ッチリとタッグを組み、SLと運命を共にする覚悟でやっています」

## 〝縁の下の力持ち〟の誇り。

整備士（下関総合車両所新山口支所）／**倉益 彰**さん（右）・**田村 優樹**さん（左）

一方、整備士の倉益彰さんも、「一昔前と違って、今は乗務員から直接『ここが不調だった』と聞けるので助かります」と社員間の連携を喜んでいる。

「代替車がないので責任重大。古いので部品のやりくりも大変ですが、梅※小路の社員と顔見知りなので何かと助けてもらって」。人と人とのつながりが安全運行を支えているのだ。

「始業点検は、あちこち叩いて音で判断します。不調部分は鈍い音がする。特にボルトが緩むと動かなくなるので要注意です」

普段は黒子に徹しているが、珍しくSLに添乗した際、降りていく乗客から「ありがとう」と声をかけられ、「誇れる仕事なんだ」と感激したという。傍らの新人・田村優樹さんが「SLは文化です。先輩からさまざまなことを学んで、将来はSLを守っていきたい」と、はにかみながら言葉を添えた。

※P12を参照

### 山口が生んだ 日本の鉄道の父 井上 勝

写真は左から、井上馨、遠藤、井上勝、山尾、伊藤。
写真提供／山口県光市伊藤公資料館

1843（天保14）年生まれ。幕末には、山口市内の小鯖で生活していたといわれる。1863（文久3）年、伊藤博文、井上馨、山尾庸三、遠藤謹助とともに英国に密航し（彼ら5人は「長州ファイブ」と呼ばれている）、鉄道技術などを学んだ。

1868（明治元）年に帰国後、1872（明治5）年に新橋～横浜間に日本初の鉄道を開通させ、東海道線の開通や日本人のみによる初の（逢坂山）トンネル完成などにも尽力。鉄道庁長官、帝国鉄道協会会長を務め、1910（明治43）年、欧州視察中にロンドンにて客死するまで、生涯を鉄道のために捧げた井上勝は「鉄道の父」と讃えられ、その銅像がJR東京駅の丸の内口に建つ※。

※現在、東京駅は工事中のため、別の場所で保管されている。

## 沿線の必見やまぐち魅力スポット

長門峡 地福 鍋倉 徳佐 津和野 篠目 仁保 新山口 湯田温泉 山口

新山口駅を出発後は、乗客たちのときめきに寄り添うように調子よく山口市街地を走りぬけていくSL「やまぐち」号だが、山口駅を経て、宮野駅を過ぎたあたりからは、ややスピードが落ちてくる。まるで「よっこらしょ…」とでもいいたげな走りっぷり？25パーミル（1000分の25）の急勾配にさしかかるからだが、これもまたSLならではの乗り心地の楽しさだ。

やがて仁保駅に到着。ここでかなり石炭をたいたのか、煙突から力強い煙を上げて再びスタート、やはり25パーミルの急勾配の連続と、最大の難所・山口線最長1897mの田代トンネルへ、汽笛を鳴らして挑んでいく。トンネルの前後では、遠く、近くにカメラの気配。ここは、SL撮影ポイントとしても知られているのだ。峠の頂上近くで待ちこがれる“貴婦人”の姿は、カメラマン諸氏にとって、まさに「高嶺の花」かもしれない。

乗車コラム

### 「仁保～篠目の急坂」

# 篠目駅 長門峡駅 地福駅 鍋倉駅 徳佐駅

SL「やまぐち」号が田代トンネルを抜けると、車窓には、のどかな田園風景や川景色、リンゴ園などが次々と展開します。篠目、長門峡、地福、鍋倉、徳佐と続く停車駅は、新たに山口市に仲間入りした阿東地域の各駅。周辺には自然と共存する魅力がいっぱい。ユニークな催しも合わせて紹介しましょう。

## 道の駅 長門峡

長門峡駅から徒歩3分

SLの見える「道の駅」は全国でもここだけ。名勝・長門峡の入り口近くの国道九号線沿いに位置し、周辺の交通・観光の情報収集や、あとう和牛肉やあとう米、果物など地元特産物の買い物、食事が楽しめる。

長門峡は、澄みわたった渓流に沿って千差万別の奇岩がそびえたち、両岸の断崖絶壁や川床の淵や穴が楽しめる渓谷美の観光スポット。遊歩道は、春は山桜、初夏は新緑やフジ、秋は紅葉、冬は椿…と四季折々の彩りに包まれる。

魚釣りやキャンプも人気。遊歩道の入り口には、中原中也の「冬の長門峡」の詩碑がある。

## 船方農場

徳佐から徒歩30分

無料解放された草原の自然を満喫し、ウサギやヤギなどとのふれあい、牛舎見物、乳しぼり、川遊び、さらにはバターづくり、ソーセージづくり等の体験やバラ、ハーブ園も楽しめる総合農場。林間バーベキューやキャンプもできる。

売店では、農場オリジナルの牛乳やチーズ、バター、ソフトクリーム等の乳製品、ソーセージ等の肉加工品や果物、花等を多数販売している。

●山口市阿東徳佐下1450-39
☎083-957-0710

●山口市阿東生雲東分47-1
☎083-955-0777
●定休日／第2火曜

## 徳佐のしだれざくら

徳佐駅から徒歩5分

徳佐八幡宮のしだれ桜は西日本随一といわれ、県内有数の桜の名所となっている。約三七〇mの参道にはしだれ桜やソメイヨシノなど約二〇〇本が植えられており、満開時にはピンクのトンネルとなる。地元のしだれ桜保存会では、幹のコケ取りなどを行って保存に努めている。毎年四月の見頃には「さくら祭り」を開催。

●山口市阿東徳佐中3673
☎083-956-2526（あとう観光協会）

## 徳佐のりんご園

鍋倉駅周辺

本州最西端、中国山地のふところに広がる西日本一の規模の観光りんご園。総面積三十五haの敷地に約一万五千本のりんごの木が植えられている。りんごの木は、春には可憐な白い花をつけ、八月十五日～十一月中下旬にはりんご狩りが楽しめる。バーベキューもできる。

●徳佐りんご観光協会
☎083-956-0553

## かかしまつり

嘉年基幹集落センターの広場では、毎年夏に「嘉年かかし祭り」を開催している。第十四回目となる二〇〇九（平成二十一）年には二十三作品七十五体を展示。

そもそもは国道三二五線沿いにある嘉年婦人会の花壇のそばに交通安全を願うかかしが立てられ、衣装を着せ替えていたことが始まり。現在では豊作と交通安全を願う恒例イベントになっている。

●☎083-958-0111（阿東地域交流センター嘉年分館）

かかしは七月下旬から八月末の祭り期間に展示し、来場者の投票により「かかし大賞」を決定。最近では世相を反映したかかしも登場し、大賞の他、優秀賞も表彰されている。

## どろんこビーチボールバレー大会

生雲では、毎年四月に地域の田んぼで「どろんこビーチボールバレー大会」を開催している。生雲開発クラブが地域活性化や農村都市間交流を目的に一九九二（平成三）年から行っているもので、二〇〇九年で第十九回目を迎えた。

大会には、四～六人でチームを作って事前に申し込めば誰でも参加できる。県外からの参加者も年々増え、今回は二十チームが出場。その名のとおり、田んぼで泥んこになりながらの大胆なプレーの連続に、毎年会場は大いに沸く。

●☎083-954-1007（阿東地域交流センター生雲分館）

## 乗車コラム 篠目の給水塔

篠目駅には、赤レンガの大きな給水塔と腕木式信号機が残されており、周囲の田園風景ともあいまって、「昔の田舎の駅」のイメージどおりの風景を見ることができる。

堂々たる大きさの給水塔は、石炭の3倍の水を必要としたというSL全盛期の貴重な遺産だ。現在の「やまぐち」号の運行では、給水は新山口と津和野の両駅で行っているためこの給水塔のタンクは撤去され、土台のみになっている。2004（平成16）年には松本清張原作のテレビドラマ「砂の器」の撮影がこの駅で行われ、小説中の亀高（かめだけ）駅（木次線）として使われた。

腕木式信号機も、1984（昭和59）年2月の山口線のCTC（列車集中制御装置）化に伴って、本来の役目を終えている。

# 終点 津和野

新山口駅から約二時間のSL「やまぐち」号の終点は、津和野。山陰の小京都とも呼ばれるこの町は地元出身の画家・安野光雅の美術館や鯉の泳ぐ堀割と白壁が調和する美しい町並みなどが箱庭のようにコンパクトに収まった城下町です。

## 津和野生まれの画家 津和野町立 安野光雅美術館

津和野駅を出ると、目の前に立つ和風建築の建物が目を引く。津和野出身の画家・安野光雅（一九二六〜）の作品を所蔵・展示する津和野町立安野光雅美術館だ。

館内は、安野氏の考案した「魔方陣」のタイルで装飾されたロビーを中心に二つの展示室が配置された展示棟と、廊下で結ばれた学習棟からなる。

展示室では安野作品を年四回テーマに合わせて展示替えしている。中庭を挟んで廊下で結ばれた学習棟には、プラネタリウム、昭和初期の教室を再現した「昔の教室」、作品や世界の絵本・美術書などを閲覧できる図書室があり、二階には安野氏の自宅アトリエが再現されている。

［安野光雅美術館］
島根県鹿足郡津和野町後田イ60-1
TEL0856-72-4155
●開館時間／9:00〜17:00（最終入館は16:45まで）
●休　館　日／3・6・9・12月の第2木曜日と12月29〜31日
●ホームページ／http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html

お問合せ先
［津和野町商工観光課］島根県鹿足郡津和野町後田口64番地6 TEL0856-72-0652

「汽車」（『歌の絵本 ―日本の唱歌より― 』）
©ANNO & ANNO ART MUSEUM

## 鯉の泳ぐ殿町 森鷗外ゆかりの地

駅から数分歩けば、鯉のいる堀割と白壁が続く殿町だ。色とりどりの鯉が泳ぐ堀割は、初夏になるとショウブがさらに風情を添える。一帯には津和野藩校・養老館跡や津和野カトリック教会などが点在している。

足を延ばして、日本五大稲荷の一つに数え上げられている太皷谷稲成神社へ。赤い鳥居がトンネル状に続く石段を上って行くのが楽しい。高台にある境内からは、赤い石州瓦の街が箱庭のように見え、正面には青野山。

さらに、津和野出身の明治の文豪・森鷗外の旧宅とその隣に立つ森鷗外記念館も訪れてみたい。駅前からレンタサイクルを利用するのも便利だ。

# INFORMATION

SL「やまぐち」号についての基礎知識はこちら。

### SL「やまぐち」号のあゆみ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1973年 9月30日 | 山口線蒸気機関車（SL）さよなら運転 | 1995年 3月25日 | 利用客 100万人達成 |
| 1979年 5月22日 | 山口線SL愛称をSL「やまぐち」号と命名 | 2003年 8月10日 | 利用客 150万人達成 |
| 8月 1日 | SL「やまぐち」号復活運転開始 | 9月30日 | 小郡駅名を「新山口駅」に改称 |
| 1987年 6月18日 | SL「やまぐち」号蒸気機関車C56-160号機 | 2004年 8月 1日 | SL「やまぐち」号復活運転25周年 |
| | 小郡機関区到着 | 2005年 3月19日 | 客車の色をぶどう色に統一 |
| 1988年 7月24日 | レトロ客車投入 | 2007年 3月22日 | SL「やまぐち」号C571「貴婦人」製造70周年 |
| 1995年 1月17日 | C57-1号機　鷹取工場で阪神淡路大震災被災 | 2009年 8月 1日 | SL「やまぐち」号復活運転30周年 |

### 《SL「やまぐち」号》●貴婦人／C571とは

C57形蒸気機関車は、初めて全て国産で造られた機関車C55形を改良した亜幹線旅客用蒸気機関車。特徴は、ボックスセンター動輪の採用や蒸気圧力の増圧など、近代化を進めた点にある。1937（昭和12）年からの10年間で201両が製造された。全国各地の主要路線で活躍し、スタイルの美しさと優秀な性能、優美なイメージから「貴婦人」の愛称で親しまれてきた。1972（昭和47）年にはお召し列車を牽引した。

C57のCは動輪軸数が3軸であることを、57はテンダ機関車（石炭、水を積んだ炭水車が機関車のすぐ後についている）であることを示している。さらに、C571の1は、C57の1番目に造られたことを表している。

【C57 緒元】●全長：20280mm ●重量：115. 5t ●動輪径：1750mm
●石炭積載量：12t ●水積載量：17t ●最大出力：1290馬力
●製造：1937（昭和12）年 ●製造場所：川崎車両

### 《もうひとつのSL「やまぐち」号》●ポニー／C56160

山口線では、C571の他にC56160が走ることもある。愛称は「ポニー」。C56は、C57よりも一回り小さい中型の機関車で、1935（昭和10）年から1942（昭和17）年にかけて全部で 160両が製造された。線路規格が低く、運転距離の比較的長い区間用に設計され、特にバック運転に備えてテンダの後部が斜めになっているのが特徴。戦時中、タイとビルマを結ぶ泰緬（たいめん）鉄道の主力SLとして使用されていたものもある。

C57は汽笛音が甲高いのに対し、このC56は汽笛音が低く、力強い。雪に強いため、クリスマスや正月の特別運行日に使用される。

【C56160 緒元】●全長：14325mm ●重量：64. 6t ●動輪径：1400mm
●石炭積載量：5t ●水積載量：10t ●最大出力：592馬力
●製造：1939（昭和14）年 ●製造場所：川崎車両

### 《平成22年度運行案内》

運転期間／**3月20日㈯〜11月21日㈰の土曜、日曜、祝日と8月お盆期間**（予定）

### 梅小路蒸気機関車館

大正・昭和期に製造された代表的な国産の蒸気機関車を保存・展示する博物館。所蔵する16形式18両のうち、SL「やまぐち」号を含む6両を動態保存している。SL「やまぐち」号は、毎年春〜秋の運転期間を終えるとここに戻され、点検・整備を受ける。さらに数年に1回は全体を解体しての点検も実施し、SL「やまぐち」号の安全運行を支えている。

梅小路機関区施設跡（京都市）に立つこの博物館は、1972（昭和47）年に日本の鉄道開業百年を記念し、貴重な交通文化財である蒸気機関車を末長く後世に伝えるために誕生した。蒸気機関車群は扇形車庫（重要文化財）に展示され、転車台も完備。館のエントランスでもある旧二条駅舎（京都市指定文化財）の内部は、資料展示室になっている。

2010年度の運行日や運行時刻、料金等については、SL「やまぐち」号ホームページ **URL http://www.c571.jp**（携帯からもアクセス可能）をご覧いただくか、右記までお問合せください。

■お問合せ先
［山口地域鉄道部］TEL：083-972-6955
［JR西日本広島支社営業課］TEL：082-264-7420
［お客様センター］TEL：0570-00-2486（受付時間：6時〜23時）

●取材協力／JR西日本広島支社 ●SL「やまぐち」号写真提供／村上義弘［巻頭P.1〜2、P.8、P.11、P.12（C571）、巻末ハガキ］、吉永昂弘［表紙、P.9、P.12（C56160）］

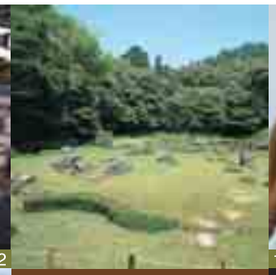
Live in 山口 UJIターン経験者インタビュー 2

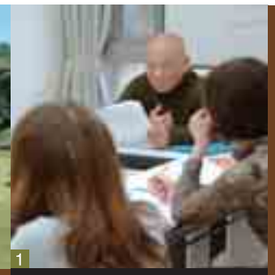
# 山口で見つけた充実のセカンドライフ。

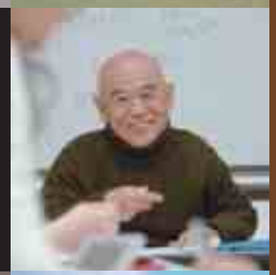
自然に親しみ、人との出会いを楽しむ。恵まれた環境のもと、第二の人生を謳歌している桜井義之さんの暮らしぶりをご紹介します。

**桜井 義之さん（七十三歳）**
一九九五年、神奈川県から山口県山口市にIターン。

2




1



3

1 桜井さんが教えているのは、旅先や日常生活ですぐに役立つ英会話。タイムリーな話題を織り交ぜた生きた英語が飛び交う。
2 自宅からすぐの場所にある足湯は、桜井さんのお気に入り。
3「山口は生活の舞台そのものが憩いの場。自然や温泉など、楽しみがたくさんあります。時間はいくらあっても足りないくらいです（笑）」

## 思い立ったら山へも海へもすぐに行ける。おまけに温泉までである。こんな素晴らしい所、ほかにないでしょう？

群馬県出身の桜井さんは、東京のIT関連企業に三十五年間勤務。慌ただしく過ぎていく毎日の中で、東京は一生住む場所ではないと感じ、いずれはのんびり田舎で暮らしたいと考えていました。定年を間近に控えたとき、たまたまご長男が山口県に転勤になったことで、山口市や長門市、萩市などを訪れる機会を得たといいます。

「以前はオーストラリアや北海道への移住も考えていました。でも、山口県に何度か訪れるうち、海や山、夜空の星の美しさ、歴史の遺産、人情の細やかさなど、東京近辺では見られない素晴らしい日本があることを知り、衝撃を受けました」

桜井さんが山口県への移住を決めたのは五十九歳のとき。

「県内のどの街にも魅力を感じましたが、豊かな自然環境と生活の利便性の両方を享受できる山口市を選びました。すぐ近くに山があり、二時間も車を走らせれば、美しい海にも出会えます。街のサイズもちょうどいい。徒歩や自転車で移動すれば大抵のものは手に入るし、道路や公園、文化施設、病院といった社会的インフラも整っている。生活に困ることはありません。大内氏時代や明治維新の史跡も残されている。いろんな魅力がコンパクトに詰まった街ですね」

お気に入りのスポットを尋ねると、「一番のおすすめは瑠璃光寺五重塔※。桜の季節は一の坂川沿いや維新公園を歩くのも気持ちいいですよ。歩いてすぐの湯田温泉は、ほぼ毎日利用しています。六十歳以上の市民は百円で入れる所もあるんです。贅沢ですよね」と恵まれた環境を存分に楽しんでいる様子の桜井さん。

「東京に住む友人たちも最初は『どうして山口に？』と言っていましたが、今では『本当に良いところを見つけたな』とうらやましがって、定期的に遊びに来るようになりました。あちこち連れて歩くので、県内の観光地はほとんど行きましたね（笑）」

## 自分ができることで社会に還元しながら、自分自身をアップデートしています。

フィリピンやアメリカなど、海外駐在の経験もある桜井さん。定年後も関連企業の顧問として、外国のユーザー団体との交渉を行ってきました。そうしたこれまでの経験とスキルを生かして、現在カルチャーセンターで週に二回、英会話の講師を務めています。

「リタイア後は社会に対して何か恩返ししたいと思っていました。自分ができることで社会に還元しなが ら、自分自身をアップデートしています。テキストを作ったり、生徒さんと英語で話したりするので、脳も活性化しますね」

普段は、インターネットで海外の新聞のチェック、録画していたテレビ番組の鑑賞、読書、同人誌への寄稿と、一日一日があっという間に過ぎていきます。週に三回はスポーツジムに通い、健康維持にも励んでいます。

「一番の楽しみは人との出会い。人格は風土や環境によって形成されるもの。山口にはおおらかで心根のやさしい方がたくさんいらっしゃるように感じます。いろんな方とお話をすると、視野が広がって楽しいですね」

二〇〇五年には船旅での世界一周も果たした桜井さん。その充実した第二の人生を支えているのは、行動力と人との出会い。何事にも好奇心旺盛で社交的な桜井さんの周りには、常に楽しみが広がっています。

「自分たちが住んでいる街の魅力に気付いていない人が意外に多いように感じます。地元の人も含め、もっとたくさんの人に山口の良さを知ってもらいたいですね」

❶角島

❷瑠璃光寺五重塔

❸一の坂川

❹湯田温泉・足湯

※室町時代、西国の守護大名といわれた大内氏によって建立された。

POST CARD

□□□-□□□□

彩都山口 http://www.city.yamaguchi.lg.jp/
機関車を列車の前後に配した特別運転"プッシュプル"で津和野一般平山間のトンネルを目指すSL「やまぐち」号

料金受取人払郵便

山口支店承認

3040

差出有効期間
平成23年3月
31日まで

切手を貼らずに
お出しください。

POST CARD

7538790

（受取人）
山口市亀山町2-1

山口市総合政策部
企画経営課内
「彩都山口Vol.2」プレゼント係 行

フリガナ

●お名前（必須）

●性別（男・女）

●ご住所（必須） 〒 －

●TEL（必須）

●年齢 歳

# ふるさとやまぐち寄付金のお礼とご報告

「ふるさとやまぐち寄付金」につきまして、ご報告いたします。平成20年度、山口市へいただいた寄附金は、251件（5,282,242円）になりました。ふるさと「山口市」への多くのご支援や温かいメッセージありがとうございました。皆様からいただいた貴重な寄附金を活用させていただき、山口市の歴史・文化・芸術・自然財産をさらに磨きあげまして、新たな魅力の創造、地域の発展へ繋げさせていただきます。

## 活用させていただいた事業

### 大内文化の薫るまちづくり

寄付金活用額／1,813,000円

### 蛍が飛び交う自然を生かしたまちづくり

寄付金活用額／1,209,000円

### 育てよう！山口元気キッズ

寄付金活用額／1,069,191円

このほかにも、「山口市発　新しい芸術の創造」、「詩人中原中也の世界を全国に広げよう」等の事業として1,191,051円を活用させていただきました。

ふるさと納税制度による寄附控除は、毎年受けられます。また、5,000円以上の寄付をしていただいた方への、「ふるさとの便り」に、この度、阿東地域の新しいお礼の品（あとう和牛など）が加わりました。
平成22年度も、ぜひ、ふるさと納税制度による応援とともに、「ふるさとの便り」を通じて、山口の味や魅力をPRしていただく協力隊になってください！

お問い合わせ
山口市総合政策部企画経営課
TEL083-934-2728　e-mail　kikaku@city.yamaguchi.lg.jp
http://www.city.yamaguchi.lg.jp/furusato/index/html

Present Quiz

# プレゼントクイズ

「彩都山口」をお読みいただいた方に感謝をこめて
「あとう和牛」または「徳佐りんごジュース」をプレゼント!
ふるってご応募ください。

**Q** 新山口駅を出発したSL「やまぐち」号が、最初に停車する駅は次のうちどれ?

①津和野駅
②湯田温泉駅
③山口駅

抽選で「あとう和牛」または「徳佐りんごジュース」プレゼント!!

## 応募方法

右下の専用ハガキを切り離してお送りください。

第1次●「あとう和牛」を抽選で5名様にプレゼント!!
応募締切2010年11月30日(火)

第2次●「徳佐りんごジュース」を抽選で10名様にプレゼント!!
応募締切2011年 2月28日(月)

[個人情報利用の目的]
ご応募いただいた際の個人情報は、誌面づくりの参考とプレゼント賞品の発送のみに使用致します。

## 編集後記

平成22年1月、阿東町が新たに山口市に加わり、当市は県内最大の市域を有す新市として新たなスタートを切りました。今号では、その阿東地域を含む新たな山口市の魅力を、SL「やまぐち」号が走るJR山口線沿いにご紹介しています。

IT全盛の現代にあって、今ではほとんど失われてしまった"アナログ"な力を結集して走り続けるSL「やまぐち」号。腹の底に響いてくるドラフト音や石炭の燃える香りを実際に乗車してぜひその身に感じていただき、車窓の風景ともどもノスタルジックなひとときを楽しんでいただけたらと思います。本誌へのご意見、ご感想をお待ちしております。

伝統から未来を彩る【西の京】情報誌

彩都山口

●Vol.2(2010年3月)
●発 行
山口市総合政策部
企画経営課
TEL.083-934-2728
FAX.083-934-2642

企画制作 株式会社 コア
Editor/編集 矢原 玲子
Writer/取材 村上 郁子
小野 理枝
Art Director/デザイン 弘岡 紀夫
Photographer/撮影 蔵澄 秀昭

## このハガキで「彩都山口」プレゼントクイズにご応募いただけます。

郵便番号、住所、氏名、年齢、性別、電話番号、アンケートの回答をご記入の上、お送りください。正解者の中から抽選で「あとう和牛5名様」または「徳佐りんごジュース10名様」を差し上げます。当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

●クイズの答え

## 「彩都山口」Vol.2の感想をおよせください。

皆様のご意見を今後の誌面づくりの参考にさせていただきます。

**Q1 「彩都山口」をどこで入手されましたか?**

1.郵送で 2.イベントで[イベント名: ]
3.友人、知人から 4.公共施設やホテル等の宿泊施設
5.インターネットで 6.その他[具体的に: ]

**Q2 どの記事が面白かったですか?**

1.巻頭特集(SL) 2.Live in 山口 3.あとう牛
4.その他[ ]

**Q3 山口市のどんなところに興味がありますか?**

1.歴史 2.自然 3.文化・芸術 4.温泉 5.グルメ
6.その他[ ]

**Q4 山口市の中でどこか訪ねてみたい場所がありますか?訪ねてみたい理由があれば、それも教えてください。**

●場所[ ]
●理由[ ]

**Q5 今後、どんなテーマの記事を読んでみたいですか?**

# あとう和牛

Atou Japanese Beef

黒毛和種は国内の和牛（肉専用種）としては最も多く飼育されている品種。その中の一つ、山口市北東部に位置する阿東地域で肥育されている「あとう和牛」は、年間に限られた頭数しか出荷されない希少なブランドです。澄んだ空気と清らかな水に恵まれた環境の下、牛のストレスを最小限に抑えるように施設の換気や通風を適切に行い、地元の稲わらや独自の配合飼料を与えて、健やかに育てられています。

あとう和牛のおいしさの秘密は、その脂の質にあります。編目状にほどよくサシの入った柔らかな霜降り肉は、脂にコクと深みがあり、いくら食べても飽きがこないのが特徴です。

その味を確かめるには、表面をさっと焼いて、塩・コショウのみで味付けをするシンプルな食べ方が一番。香ばしく焼けた肉の香りが鼻孔をくすぐり、和牛ならではの風味、深みのある脂が舌の上で溶け合って、口いっぱいに旨味がジュワーッとひろがります。余韻までも楽しめるそのおいしさはヤミツキになること請け合い！県内各地はもちろん、県外からもわざわざ足を運んで買い求めるリピーターが多いというのもうなずけます。

優れた環境の下、生産者の愛情をたっぷりかけて丹念に育てられたあとう和牛。ギュッと詰まったそのおいしさを、ぜひ一度お試しください！

PRINTED WITH SOYINK™ 環境にやさしい大豆インクを使用しています。
再生紙を使用しています。